

Graz大、藤田G)、R03「無機系キラル結晶キラル誘起スピン選択性」(大阪府大、東邦大、放送大、装置開発・山本G)、R04「六方晶Ba<sub>2</sub>H<sub>3</sub>X (X =Cl, Br, I) のヒドリド導電特性」(京大、小林G)であった。質的な成果も大変優れていると評価された(いずれも題目は簡略化した)。

本事業は令和3年度からマテリアル先端リサーチインフラ事業(令和3年

~12年度)として発展的に継承され、共用に加えてデータベース構築とデータサイエンスへの展開が目的に加わった。分子研は「マテリアルの高度循環領域」スポーク機関と「横断技術領域(物質・材料合成プロセス)」責任機関として貢献することとなった。引き続き、利用者の方々の多くのご利用と支援者の方々の成果輩出への貢献を期待したく、よろしくお願い申し上げます。



## 受賞者の声

瀬川泰知准教授に宇部興産学術振興財団第62回学術奨励賞

伊澤誠一郎助教に2022年度分子科学研究奨励森野基金研究助成

米田勇祐助教に日本生物物理学会若手奨励賞

古池美彦助教にSPRUC 2022 Young Scientist Awardおよび日本生物物理学会若手奨励賞

中村永研技術職員に第10回日本放射光学会功労報賞

## 瀬川泰知准教授に宇部興産学術振興財団第62回学術奨励賞

このたび、公益財団法人宇部興産学術振興財団(2022年8月よりUBE学術振興財団に改称)第62回学術奨励賞を受賞いたしました。本奨励賞は有機化学、無機化学、高分子化学、機械・計測制御・システム、電気・電子、医学を含む幅広い自然科学分野の優れた独創的研究をしている若手研究者に贈呈される歴史ある賞です。私が今回提案した研究課題である「3次元トポロジカル構造制御を鍵とした結晶性有機半導体材料の開発」は、3次元的な広がりをもつ有機分子の設計・合成をも

とに新たな有機半導体材料物質を開発することを目的としたものです。研究を進めていくうちにたくさんの方の困難にぶつかっていますが、このように将来性を評価して支援していただける機会は非常にありがたく、明日の研究の推進力となります。

最後になりますが、一緒に研究を進めている瀬川グループのメンバー、NMRや質量分析装置のサポートをいただいている機器センターのみなさま、量子化学計算でいつもお世話になって



いる計算科学研究センターにこの場を借りて感謝申し上げます。

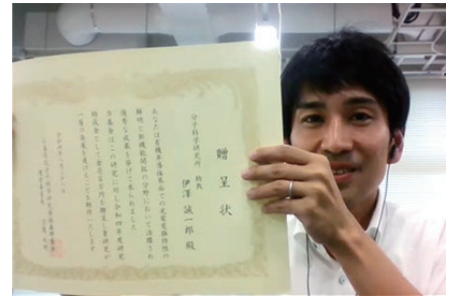
(瀬川 泰知 記)

## 伊澤誠一郎助教に2022年度分子科学研究奨励森野基金研究助成

このたび、「有機半導体界面での光電変換特性の解明と新機能開拓」という研究題目で、2022年度分子科学研究奨励森野基金研究助成を受賞しました。本賞は故森野米三先生の寄付により始められた基金で、分子科学分野の若手研究者の発展を期待して、助成金が交付されるものです。

まず本賞に関しまして、ご推薦頂きました千葉大学工学研究科の石井久夫先生に深く感謝の意を表します。8月31日の本賞の研究助成金贈呈式に付随して、10分程度の短い講演を行いました。私がこれまで行ってきた有機太陽電池の発電原理の解明に関する研究や、最近行っている光電変換を利用した新たな光機能である光アップコンバージョンや有機

EL素子の研究などを手短かに発表しました。残念ながらオンライン開催でしたが、分子科学分野の大御所の先生方から様々なご意見を頂き、非常に励みになりました。特にこれらの私の研究の中心概念である電荷移動 (CT) 状態のスピン制御について、分子研の名誉教授でいらっしゃる岩田末廣先生からCT状態のエネルギーの縮退に関する研究を55年前の博士論文で発表しているというコメントを頂きました。その研究は長倉三郎先生の研究室で行われた研究で、私の恩師である橋本和仁先生も長倉先生の研究室の出身であることから、長倉先生が創設に関わられた分子研でCT状態の研究をして、森野基金まで頂けたことに変感銘



を受けました。先生方の先見の明に感服するとともに、様々な歴史を感じることができ、とても刺激になった1日でした。

最後になりますが、これまでご指導いただきました上司の平本昌宏教授と、本研究の測定にご協力いただきました機器センターの上田正さんに感謝の意を表します。今後もより良い研究成果を上げられるよう頑張ります。

(伊澤 誠一郎 記)

## 米田勇祐助教に日本生物物理学会若手奨励賞

この度、「励起子電荷分離混成が酸素発生型光合成を駆動する」という研究題目で日本生物物理学会若手奨励賞をいただきました。この若手奨励賞は生物物理学の発展に貢献する若手会員に対して将来への期待を表明するために設立された賞で、書類審査による一次選考と、口頭発表を審査する二次選考によって、特に優秀な発表を行った5人以内の講演者に授与されます。

生物物理学会は自分が学生のころから参加してきた最も思い入れのある学会の一つでした。毎年参加者が1000人を超える比較的規模の大きな学会で、多様なバックグラウンドの人たちの発表を聞けるほか、自分のメインピックの一つである光合成の分光・ダイナミクスに関する研究でも、常に最新の議論が行われてきました。そういった

活気のある本学会の若手奨励賞は、これまでも尊敬する方々が受賞されているのを拝見するにつけ、いつかは自分も受賞できればいいなと思っていました。

今回の選考過程では、二次選考の口頭発表において、隣の研究室の古池さんを含む10人が審査対象となりました。古池さんは最近いい論文を出し続けておられたので、「これは厳しい戦いになるな……」と内心焦っていました。発表当日を迎えるまですごく緊張していましたが、秋山先生には「二人一緒にとれるといいなあ！」と温かい言葉をかけていただきました。最終的には写真の通り分子研から二人同時に受賞することができて、ものすごく嬉しかったです。

最後に、今回の受賞内容は主にカリ

左から7番目が筆者。  
4番目が同時受賞した古池助教。



フォルニア大学バークレー校でのポストドク時代に行った研究成果によるものです (Nature Communications 13 (2022) 2275)。本研究を共に進めてきたFlemingグループの皆さん、Iwaiさんにこの場を借りて感謝いたします。そして次は分子研倉持グループでの研究でもいい成果が残せるように、これらからも頑張って研究を行っていきたいと思います。

(米田 勇祐 記)

## 古池美彦助教に SPRUC 2022 Young Scientist Award および日本生物物理学会若手奨励賞

このたび、大型放射光施設 SPring-8 のユーザー共同体 (SPRUC) の SPRUC 2022 Young Scientist Award および日本生物物理学会の若手奨励賞を受賞いたしました。

SPRUC Young Scientist Award は、SPring-8 の利用・解析法の開発あるいは、SPring-8 を活用した成果創出に寄与した若手研究者に与えられる賞です。私はシアノバクテリア概日時計のメカニズムに迫るため、時計タンパク質 KaiC の結晶構造解析を SPring-8 で進めてきました。ビームラインの皆様のご協力のおかげで、その原子構造を解明することができました。9月26日に SPring-8 で行われた授賞講演では、本研究の意義を改めて説明させていただくとともに、SPring-8 で積み重ねられてきたこれまでの構造生物学の素晴らしい成果なしには本研究が実現しえなかったことをお伝えしました。お世話になった先生方からも温かいお言葉や

ご助言をいただくことができ、大変貴重な機会を与えていただきました。そして本賞に関し、ご推薦いただきました高エネルギー加速器研究機構の足立伸一先生に深く感謝申し上げます。

9月28日から函館にて開催された日本生物物理学会年会では、若手奨励賞選考会が実施されました。書類選考により招待された同世代の講演者と一緒に、同じ壇上で互いの研究の意義や魅力を伝え合うのは新鮮な経験でした。英語で簡潔にアピールすることが求められており、時計タンパク質 KaiC の仕組みを説明するプレゼンテーションを何度も練習して臨みました。終わった後には、みんな安堵した表情で互いの健闘を称え合いました。選考会の後も、様々な先生方と研究内容についての議論をさせていただくことができ、有意義な学会参加となりました。授賞式では分子研・倉持グループの米



田さんと同時受賞となったことがアナウンスされ、また分子研の先生方にお声をたくさんかけていただきまして、忘れられない日となりました。

最後になりますが、これまでご指導いただいた秋山修志教授、向山厚助教、一緒に作業をしていただいた研究室の皆様、共同研究をさせていただいた先生方、支えてくれた家族に感謝いたします。賞の名に恥じぬように、今後とも精進いたします。

(古池 美彦 記)

## 中村永研技術職員に第10回日本放射光学会功労報賞

このたび、第10回日本放射光学会功労報賞をいただきました。「UVSOR」と「あいちSR」という2つの放射光施設にて働かせていただけたことが受賞につながりました。「UVSOR」は、建設当初の第二世代光源から2度にわたって高度化され、加速エネルギー1 GeV 以下の放射光源では、世界で最も高い輝度を誇るようになりました。この高輝度化に伴い、放射光を取り出すビームラインも、初期の偏向電磁石光源だけの時代から、現在のアンジュレータ光源が主流へと大幅に更新されてきました。その中で、放射光利用が手

探りだった黎明期から現在に至るまで、ビームライン担当者としてのユーザー対応とビームライン技術開発及び真空技術開発に関われたことに感謝いたします。また「あいちSR」では、放射光の初点に立ち会う機会を得ました。また、真空紫外・軟X線ビームラインBL7Uの立ち上げにも参加させていただきました。このような機会を与えていただきました「あいちSR」の皆様、特に、竹田美和・あいちSR前所長、並びに名古屋大学SRセンター高島圭史教授にお礼申し上げます。最後に、この場をお借りして、ご



第36回日本放射光学会年会授賞式にて。

推薦いただいた皆様並びに分子研の皆様にご心よりお礼申し上げます。

(中村 永研 記)